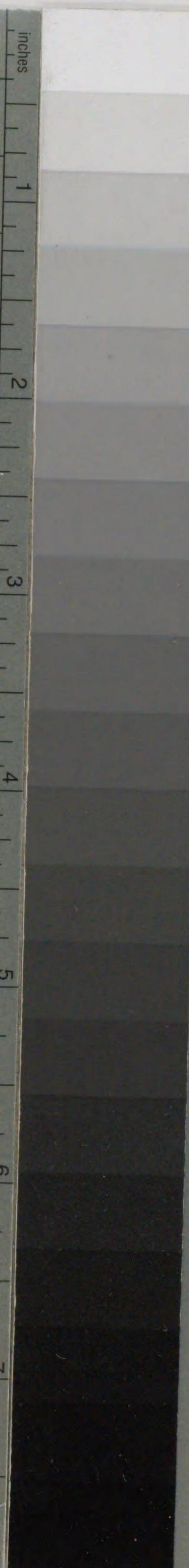


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

- A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Inches 1 2 3 4 5 6 7 8
cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

Blue

Cyan

Green

Yellow

Red

Magenta

White

3/Color

Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



最要鈔

藤井惠照

目次

第一章 序 説……………三

一 最要鈔とは……………三

二 最要鈔本文……………四

第二章 大無量壽經物語……………七

一 序幕(出世本懷)……………八

二 法藏菩薩の發願修行……………九

三 佛身と佛土の完成……………一〇

四 衆生往生の完成……………一一

五 釋尊の勸誡……………一二

六 善惡信疑の勸誡……………一四

第三章 最要鈔を拜讀して……………一四

一 水に畫く心……………一六

二 身命と心命……………一八

三 雙樹林下往生……………一九

四 金剛堅固の信……………二二

五 平生業成……………二三

六 横超斷四流……………二四

第一章 序 説

一 最要鈔とは

最要鈔は初めに第十八願と成就文を引用してその要義を述べ次には正信偈の憶念彌陀佛本願の四句を引いて信心正因稱名報恩、一念業成の宗義をあらはしてゐる。最要鈔と名づけたのは阿彌陀如來の四十八願中の最も重要なる第十八願について書いてある書物といふ意味である。本書の奥書には「康永二歲四月廿六日、大谷殿の御法門なり。目良(地名)の寂圓房道源の爲に御病中に於て從覺右之を筆記す。」とある。又慕歸繪詞(卷十)には「或は最要鈔とて小帖あり、先年法印風痾に侵されしとき、目良の寂圓道源訪ね來れりし次に、臥ながらしめしし法語を口筆す。第十八の願意を釋する文なり。」とあつて、この兩文によると、この書は覺如上人が七十四歳の御時、即ち康永二年四月に風邪にて病床にあられた時、折から訪ねて來た寂圓房の願ひによつて第十八願の肝要を話されたものを、從覺上人が筆記して出來たものである。小帖と云はれる通り極めて短いものであるから講讀に先だちて左に本書の全文をあげておく。

二 最要鈔本文

(一) 大無量壽經に言はく、「設ひ我れ佛を得んに、十方の衆生、至心に信樂して我が國に生れんと欲し、乃至十念せん。若し生れずば正覺を取らじ。唯五逆と正法を誹謗せんとをば除かん。」(第十八願)

同願成就の文經に言はく「諸有の衆生、其の名號を聞きて信心歡喜し、乃至一念せん。至心に廻向したまへり。彼の國に生れんと願すれば、即ち往生を得。不退轉に住せん。唯五逆と正法を誹謗せんとをば除く。」

この願成就の文に信心歡喜乃至一念と言へり。この信心をばまことの心と讀む上は、凡夫の迷心にあらず、全く佛心なり。この佛心を凡夫に授け給ふとき信心と云はるゝなり。凡夫のまことの心と思しきは一念おこすに似たれども、全くすゑとほらず。しかれば光明寺の御釋にも、たとひ清心を起すと雖も水に畫かけるが如しとみえたり。破れ易きこと言ふに及ばず。往生ほどの一大事を破れ易き凡情をもて治定すべきにあらず。しかれば御釋に「共に金剛の志を發し、横に四流を超斷せよ。彌陀海に願入し、歸依し合掌し禮したてまつる。」と言へり。金剛の志を發すといふはいまの願成就の信心歡喜の心なり。我が賢くて信ずる心にあらず。聞其名號といふ聞は善知識にあふて如來の他力をもて往生治定する道理を聞き定むる聞なり。同じき經に「其佛本願力、聞名欲往生」とも見えたり。又この經の流通にも「其有得聞、彼佛名號」とらあり。宗師の御釋にも「彌陀智願海、深

廣無涯底、聞名欲往生、皆悉到彼國」とら云へり。また、祖師親鸞聖人の御釋にも「本願の生起本末を聞くべし」と見えたり。經釋すでに聞をもて詮要とせられたり。よく聞くとこゝろにて往生の心行獲得する條顯然なり。知るべし。

(二) 又教行信證に曰く「彌陀佛の本願を憶念すれば、自然に即時必定に入る。唯能く常に如來の號を稱して、大悲弘誓の恩を報ず應し」

この文の心は、彌陀佛の本願を憶念する時、たちどころに必定に入ると見えたり。必定と云ふはすなはち四十八願の中の第十一の必至滅度の願なり。自然と云ふは如來の本願力をもて往生を必定せらるゝこゝろなり。來迎をたのまず、臨終を期せざる願あきらけし。しかれば經釋ともに本願の生起本末を聞き得る時分にあたりて、往生を得證する條文にありて明けし。人みな思へらく、果縛の穢體破るゝ時ならでは往生の行業成すべからずと。しかるにその條備案なり。その故は善惡の二報しからず。先づ性相の定むる所の惡業を平生のとき造作する時分に三惡必墮の業因、最後終焉にさきだちて治定するにあらずや。造惡につきて生處臨終にあらずと雖も治定する義必然ならば、善惡は相對の法なれば善業も亦あひかはるべからず。これによりて往生の義あるべし。假令身心の二つに命終の道理あひわかるべき歟。無始よりこのかた生死に輪廻して出離を稀求しならひたる迷情の自力心本願の道理を聞くとこゝろにて謙敬すれば、心命盡くる時にてあらざるや。そのとき攝取不捨の益にもあづかり、

住正定聚の位にも定まれば、これを即得往生と云ふべし。善惡の生處を定むることは心命の盡くる時なり。身命の時にあらず。しかれば臨終を期すべからざる義道理文證あきらけし。信心歡喜乃至一念のとき即得往生の義治定の後の稱名は佛恩報謝の爲なり。更に機のかたより往生の正行とつのであるべきにあらず。應報大悲弘誓恩と釋し給へるにて心得べし。大概これをもて思擇すべきなり。

(奥書) 康永二歲四月廿六日、大谷殿の御法門なり。目良の寂圓房道源の爲に御病中に於て從覺右之を筆記す。時に康正三(乙丑)二月廿日之を書す。右筆蓮如、四十三歲。

第二章 大無量壽經物語

大無量壽經に説かれてある四十八願の中で、往生淨土の行業に關する願文は第十八願と第十九願と第二十願との三つである。この中第二十の願は極樂淨土に參り度いと、念をわが淨土にかけて南無阿彌陀佛と口に稱へその稱へた功德によつて、(功德を廻向して)淨土に往生せんと欲するものは必ず參らすべしといふ本願である。第十九願は諸善萬行を修して淨土に廻向すれば此の世の命終つて、臨終になつた時は必ず迎へに來てやらうといふ願である。この第十九の願を修諸功德の願と云ひ、第二十の願を植諸徳本の願と云つて、何れも自力修行の臭味を脱しないものである。そこで本當の他力の妙味は第十八願(至心信樂の願)によつて初めて味はられるのである。故に第十九願よりも、此の第十八願が大切な願たることは云ふまでもない。彌陀の四十八願も要するにこの第十八願一つに歸するのである。最も重要な本願である。本書を最要鈔といふ所以である。然らば一體この第十八願を中心とし根本として説かれてある大無量壽經とは如何なるお經であるか、又阿彌陀如來は如何にして本願を成就せられたか、これらについて左に大無量壽經の筋書を話して見よう。

一 序 幕 (出世本懷の表示)

釋尊、即ち釋迦如來様が、或る時、靈鷲山に在して、お弟子の摩訶迦葉や舍利弗とか目連尊者、阿難尊者等を初め普賢菩薩や文殊菩薩や彌勒菩薩等に對して說法せられた。その時釋尊の顔色が急に輝いて如何にも満足そうな莊嚴な色に變つたので阿難尊者は不思議に思つて、立ち上つて尋ねた。「今まで私は長らくお弟子としてお傍について說法されたのを聞いたが今日のやうに光り輝いたお顔を拜し奉つたことはない。これは何か特別な深い譯があるので御座いませう。」と、この時釋尊は微笑みをたゞへながら阿難尊者に答へた。「阿難よ、よく尋ねた、私は今日まで諸所方々で說法したけれども、その根本はたゞ阿彌陀如來の本願を説いて、三界の一切衆生に、眞實の大利益を恵み與へてやらうと欲するに外ならぬ。この法は實に千載一遇の法であつて、恰も千萬年に一度しか花の咲かない優曇華の出づるにも似たるものである。今日初めてこれを説き、三世諸如來の出世の本懷を果し遂げんとするものである。阿難よく聽聞せよ」とて法藏菩薩の發願修行を説く。

二 法藏菩薩の發願修行

昔阿彌陀如來が未だ佛にならない以前、即ち因位にありて法藏菩薩と名のつてゐた時、世自在王佛の御許にて、無上の殊勝の誓願を起して、「我れ世に於て速に正覺を成就して、諸の生死勤苦の本を抜かんと欲す、如來願はくば我が爲に經法を宣説したまへ」と請はれた。その時世自在王如來は、法藏菩薩のために二百十億の諸佛の淨土に於ける種々の有様を説き示して、譬へば如何に大海の水多しと雖も、何千年何萬年と云ふ長い間絶えずゆるまず汲みつくしたならば遂には海の底の見ゆるまで汲み盡して海底の寶を取る事が出来る様に、至心に精進して道を求めたならば必ず如何なる願も成就することが出来るかと教へた。そこで法藏菩薩はこれを聞いて心靜かに考へ思案すること五劫の間、一劫といふのは天人が三年に一度天から降りて來て羽衣の袖で大きな岩を觸で、歸る、そしてその岩を磨り滅らして無くしてしまふ年月が一劫であるから何萬年かゝるか分らぬ。これを五劫の間と云ふのである。法藏菩薩はこの長い思案の揚句、二百十億の諸佛の淨土の中から最も善いところばかりを選び取つて來て四十八の大誓願を建立した。これを世自在王佛に申し上げた處が世自在王佛は「この立つるところの四十八願は必ず成就するであらう、そしてあなたは必ず成佛して阿彌陀如來となるであらう」と固く保證して下さつた。その後法藏菩薩は不可思議兆載永劫の長い間、衆生に代つて功徳を積まれ遂に成佛して阿彌陀如來となられた。これは今から遠い／＼昔のこと、十劫の間も以前のことである。

三 佛身と佛土の完成

釋尊は更に阿難に語る、斯様にして法藏菩薩は今は既に成佛して阿彌陀如來（無量壽佛）となられて、此の土を去ること西方十萬億土の極樂世界に居られる。その極樂國土には金銀珊瑚等の七寶自然に具はり、地獄とか餓鬼とか畜生とかの醜い苦しみは一切ない。夏が來ても冬が來ても暑さ寒さの憂へはない。自然快樂の世界であるから極樂と名づけるのである。又無量壽佛の光明は比類するものなく、諸佛の光明は一由旬より、二三四五由旬に至り又は一佛土を照し或は百佛世界、千佛世界を照らす等の限度があるけれども、無量壽佛、阿彌陀如來の光明には限量がない、無量光、無邊光、無礙光、無對光、炎王光、清淨光、歡喜光、智慧光、不斷光、難思光、無稱光、超日月光である。阿彌陀佛には壽命長久にして稱計ることが出來ない。又極樂世界には無數の聲聞、菩薩、天人共が居て夫等の人々の光明も亦阿彌陀如來の光明と同じ光明を放つてゐる。これはみな阿彌陀如來の神祕なる力によるものである。極樂世界の池の中には種々の美しい花が咲き誇つて無量百千億の光明を放つてゐる。青い花には青い光りを放ち、朱い花からは朱色の光明を放つ、まばゆい程の有様は、とても日輪や満月と比較にはならない。この一々の花の中からはまた三十六百千億の光明を放ち、その一々の光明の中から更に又美しい光りが輝き流れて一々の光明の中には無數の佛様が現はれて阿彌陀如來と同様に說法をして一切の衆生を濟度する。

四 衆生往生の完成

この極樂世界に生れる者は何れも正定聚の者ばかりで、邪定聚の者は一人も居ない。十方世界のありとあらゆる諸佛菩薩は皆共に口を揃へて阿彌陀如來の不可思議な力を讚嘆する。そこでこの世の中の一切の衆生が斯る諸佛如來の讚嘆したまへる不可思議功德の名號を聞いて、信心歡喜し乃至一念すれば、阿彌陀如來は至心にその功德を衆生のために廻向して下さる。それであるから極樂に往生せんと願ふ者は即得往生、不退の位に住することが出来る。どんな世界のどの様な衆生でも、上輩、中輩、下輩の天人でも人間でも、一向專念に阿彌陀如來を信じて疑ひの心を起さず、至誠心を以て極樂に往生せんと願ふならば皆残らず、等しく往生を得る。又十方恒沙の諸佛國に於ける無數の菩薩達も、阿彌陀如來のこの本願力によつて、その名號を聞いて往生せんと願へば、自力を用ゐず、他力によつてそのまま自然に不退の位に住することが出来る。かくの如くにして東方佛國よりも無數の菩薩が阿彌陀如來の許に往つておられる。北方佛國よりも南方佛國よりも、四方上下の各佛國より無量無數の諸菩薩が我も我もと極樂世界目ざして往つておられる。殊に此の世界から往かれたる觀音菩薩と勢至菩薩の二方は特に目立つて光つて居られる。

五 釋尊の勸誡

これまでは釋尊が阿彌陀如來の極樂淨土を建立せられた物語りを阿難尊者に説いたものである。次に釋尊は彌

勒菩薩及び諸天人等に説法される。「阿彌陀如來の國土や聖衆の有様は此の通りであるが、何故努力精進して極樂往生を求めないのであるか。此の世の中は暫くも安らげき時はない、愛欲葛藤の世の中である。もし安樂國に生れんと願ふ者あらば智慧明達に功德殊勝なることを得るのである。」かう云つた時彌勒菩薩は大衆を代表して答へ奉つて曰く、「今佛に値ひ奉りまた無量壽佛の名號を聞いて心開明なるを得て歡喜極まりなし」と。

すると釋尊は彌勒菩薩に告げて、「汝及び十方の人々は是れまで長い間五道に轉展輪廻して苦勞して來たけれども今日佛に値うて法を聽く事を得、又無量壽佛の名號を聞くことを得たことは何と幸福なることであらうか。これからは生死病苦の身の上に執着することなく、諸善を修行して、自分を救ひ又他人をも救ふべし。たとひこの世一生の間苦しい目をするともどうせこの世限りの事である。短かい人間の一生を終れば、次は阿彌陀如來の淨土に生れて、無限の楽しみを享受することが出来る。」

彌勒菩薩はこの言葉聞いて、専心修行して、教の通りに奉行して、少しも疑ひはないと申し上げると、更に釋尊は五惡五痛五燒の相を説いて一心制意端身正行して五善の道を修すべきを勧める。

六 善惡信疑の勸誡

この時釋尊は阿難尊者に告げて言ふやうには、「汝起ちて衣服を整へ、合掌し恭敬して無量壽佛を禮すべし」

と、云はれるまゝに阿難尊者は起立して西方に向つて兩手を合せて、身體を地に伏し無量壽佛を禮拜した。その時無量壽佛は大光明を放つて一切の諸佛世界を照らした。そうすると聲聞や菩薩の一切の光明は悉く消されてしまつて阿彌陀如來の光明だけが輝いて見えた。一座に居並んでゐた阿難尊者を初め大勢の人達は何れもこの不思議な有様を見た。ところが此の時に、その西方極樂世界の中に胎生の者とか化生の者が居つたのを見て彌勒菩薩はこれは不思議なことであると思ひ釋尊に尋ねた。すると釋尊は答へられて云ふに、「あれは疑ひの心がまだ残つてゐて佛智を信ぜず然も猶ほ罪福を信じて善本を修習して往生を願つた者であつて、そう云ふ者は極樂へ往生しても、なほ五百年の間は佛にも會へず、法を聞くことも出来ず、菩薩や聖衆を見奉ることも出来ないものである。之があゝの胎生の者である。佛智を明らかに信じて信心廻向するならば、淨土に自然に化生して須臾の間に身相光明も智慧功德も、悉く具足成就することが出来る。佛智を疑ふ心の如何に恐ろしいか、分るであらう」と誠められた。

これで大無量壽經の説法は一段落になつてあとは流通分と云つて、この經の功德を述べて廣く大ぜいの人々にも説いて聞かせる様、彌勒菩薩にこのお經を依囑して宣傳する様すゝめたるものである。

第三章 最要鈔を拜讀して

一 水に畫く心

阿彌陀如來はその昔まふと法藏菩薩といふ御名前であつた時に、此の世の迷へる衆生を一人殘らず救はんとする大願を立てて、世自在王佛の御許にあつて長い間修行せられた。その時立てられた四十八ヶ條の本願が遂に成就して、法藏菩薩は今西方阿彌陀如來とならせられてゐるのである。我々は今この本願成就の阿彌陀如來の御力によつて南無阿彌陀佛の信心を得させて貰つてゐる以上地獄に落ち様道理はない。五劫思惟の修行はもとより、信心までを與へて下さるのである。棚からボタ餅といふが、いくらボタ餅を作つてくても無智無力の半病人、頻死の凡夫であつたなら、その美味い餅をかむことも出来ぬ、味はふことも出来ぬ。いくら立派な本願が成就してゐても信する心がなかつたならば、猫に小判も同様である。併し廣大無邊な如來の御慈悲には、すつかり出来上つたボタ餅をかむ力、味はふ力までを與へて下さるのが第十八願の謂れである。本願成就の文に信心歡喜乃至一念と云ふ信心とは、佛ごゝるであり、まことの心といふ意味であつて、この佛心を吾々に授け與へられた時信心と云ふのである。吾々から起した信心とか、吾々の理智判斷で信するなど云ふ事はあり得べからざる事である。若し

あつてもそれは本當の信する心ではない。「凡夫のまことの心と思しきは、一念おこすに似たれども、全くするとほらず」で、此の世はおろかあの世までもと、互に二世を契るといふ様な男女の愛の中にも醜い疑ひの心や嫉妬心みでちが起る、命をかけて飛び込んで行つた相手の胸の中うちでも、一寸した事から破端を來すのが戀の道の習ひである。弱い人間に信するなど云ふ心があり得る筈はない。

善導大師の御言葉にも「たとひ清心を起すと雖も水に畫けるが如し」とある通り、さも殊勝らしい心を起してみてもやがてあとかたもなく消え破れてしまふ。人間に取つて最も深刻なる戀愛でもそうである。まして人生如何に生くべきか、生死の大問題である往生の一大事については安心とか信心とか口にする値打もないのが我々凡夫である。一通りや二通りの決心でなされたのではない。たとへてみれば、小さい子供に底のない紙袋にお菓子を一ぱいやると云ふが、これはあり得べからざる事を意味するのである。又ざる桶で水を汲んで来いと、これは出来ない相談である。處が阿彌陀如來の本願はこんなざる彌で水を汲んだり底のない入れ物にお菓子をつめる以上のことをなされたのである。五劫の間の御修行、兆載永劫の間の御苦勞といつて、やわらかい天人の羽衣で大きな岩を觸で、岩を磨り消してしまふ、而も三年に一度しか天から降りて来ないといふ。この岩一ツを磨り滅す年月を一劫といふのである。如來は而も五劫といひ永劫といふ、幾千年か幾萬年か分らぬ程の長い間の難行苦行である。かゝる修行を吾々にしようと教へられても不可能な事であり夢の様な話である。修行ばかりが此の様に

むつかしいと思つてはならぬ。信心とてもそうである。得よう得ようと自力の心で求めてゐる間は、凡夫の力ではどうする事も出来ぬ。聞其名號もんきみごうと云つて、我々の智慧のはたらしきによつて信ずる心ではなく、善知識ぜんちしきにあふて如來の有り難い御救ひの聲を聞くのが信のいはれである。自分の力で信ずるのではない。如來の力によつて信じなければならぬ様になつてゐるのである。即ち聞かせてもらつて信じさせられるのである。

二 身命と心命

教行信證(正信偈)に「憶念彌陀佛本願おくねんみだぶつほんぐわん、自然即時入必定じねんじきじつにひつじつじやう、唯能常稱如來號ゆいのみつじやうしよによつごう、應報大悲弘誓恩おうほうだいひぐせいおん」と云ふてゐる通り、阿彌陀如來の本願を憶念する時、直ぐ様、何の手段も要せず往生定まる故に、「其佛本願力、聞名欲往生」といひ、又「其有得聞、彼佛名號」と云ひ、「彌陀智願海、深廣無涯底、聞名欲往生、皆悉到彼國」と云ふ様に、如來の他力によつて往生決定する理由を聞き定める時、即ち本願の生起本末しやうきほんまつを聞いた時が往生治定さだまの時である。

然るに世の中の人には往生といふ事について種々誤つた考へを有つてゐる人が多い。困つた時に往生した、とか、暑さ寒さにあてられて往生したとか、悪い方面にばかり往生を考へてゐる。死んだ時に、とう／＼あの人も往生した、と云ふ。往生といふのはそんなものではない。この肉體が死んで行く時が往生ではない。立派な極樂淨土に生れ變るのが往生で、死ぬとか、弱つたとか云ふ縁起の悪い往生ではない。而も肉體が滅して、死ななげ

れば往生は出来ぬかと云ふと、そんな考へは間違ひの元であつて、此の世の中で善い事をすれば極樂へ行き悪い事をすれば地獄へ墮おちる、悪事なら悪事をした時、善事なら善事をした時、その時に既に地獄行き、極樂行きの種を作つたのであつて、往生は平生の時に既に定まるものである。何にも死にかゝつた臨終の時に地獄か極樂か決定するのではない。

肉體に壽命があつて、壽命盡きて死んで行くやうに、心にも善悪二つの壽命があつて心命盡くる時に地獄往生極樂往生がある。但し地獄へは往生とは云はぬ。地獄は墮ちる、墮ちて行く、といふ。痛い目にははされる地獄である。世俗的な意味ではむしろ地獄の方が大いに往生するのであるが。生れるはお目出度いが「往く」「行く」といふのは何となく淋しい悲しみを有つた言葉である。うら若い娘が經濟的破綻の故に賣られて行く、忠臣藏のお輕の「私や賣られて行くわい」の行くの味である。餘談はさておいて、往生とは何も死んでからの往生ではない。無始曠劫むしこうくわうよりこのかた生死に流轉りゅうてんし迷ひ迷つた揚句、いよく今生に於ては、彌陀の力によつて流轉りゅうてんの縛たばを斷ち切つてこの娑婆世界しゃばを最後にお淨土に生れ度いと願ふ時、如來の本願を聞いて勿體なやと信じ歡ぶ時に往生疑ひないといふ正定聚せうじやうじゆの位に至るのであるから、これを即得往生そくとくわうじやうといふのである。肉體はこの世のなほ止つてゐるが「心は淨土に遊ぶなり」で、精神は今までの凡夫の心が死んで淨土へ往生した譯である。身命の盡きる盡きないは問題でない。心命の盡きた時が往生である。いよく往生と定つてみればその後のちに稱へるお念佛は佛恩報

謝の御念佛であることは明らかである。

三 雙樹林下往生と難思議往生

彌陀如來の成就なされし西方極樂世界は、阿彌陀經にも説かれてある通り我々の想像も及ばぬ立派なる世界である。寶石を散りばめた高い塔や輝く宮殿があり、金の砂を敷きつめた池、青や赤の蓮花が咲き、美しい鳥が囀つてゐる。これに比較すればこの我々の世界はどうだらう、一つの花も咲かない、一つの宮殿もない、荒れはた野原のやうな世界、たとひ頑丈なお城があつても血を流す戦争ばかりしてゐる、美しい花が開いても金銭利欲のためにはすぐ手折つてしまふ。お浄土のやうな美しい心の平和な世界とは天地の差がある。併しこのやうな汚い、醜い世界を一日も早くのがれて死んであの世へ生れようといふのが往生の本義ではない。

往生とは、阿彌陀如來の第十八の本願を信じて疑ひないのその一念に於てそれが即ち往生である。未來の他界を目ざすのではなく、二卷鈔にも、「本願を信受するは、前念命終なり、即得往生は後念即生なり」とある通り、死んだらあの世へ行かうと云ふのではない。本願を信受する一念の往生は、今この身このまゝ、現在での往生である。これが本當の往生、難思議往生であつて、この本願を信受しない往生は雙樹下往生又は難思議往生と言ふのである。

本願を信受しない雙樹林下往生とは如何なるものかと云ふと、それは菩提心を起して、此の浮世を厭ひ浄土を希求して、色々の善根功德を施して往生をしようと期待する心である。この期待する心に現はれる浄土は不滅の彌陀や常住の浄土ではない、化現の浄土である。又難思議往生といふのは種々の修行をするに、唯一つ念佛を力とし、阿彌陀如來のお救ひを願ふ、そして往生せんとするものを云ふ。これはまだ如來の眞實のお慈悲の分らない往生人である。眞の難思議往生はそう云ふものではない。それは救ひを求めて稱へる念佛でもなく、浄土を願つてする念佛でもなく、自力の心を打ち砕いてしまつての念佛、教行信證に仰せられてある「専修といふは念佛して自力の心を離る、」そう云ふ念佛で、この時に稱へる名號はそのまゝ聞名であつて、自分の稱へておるのではなくして如來の方から喚び招いて下さる聲を聞いてゐる姿である。

四 金剛堅固の信

信心の重要なことは改めて云ふまでもないが特に眞宗に於ては一般佛教に云はれる様な意味の信心とは天地の違ひがあるのである。智慧と對立した信心ではなく聖人の「涅槃の眞因は唯信心を以てす」と云はれた様な絶對的な信である。

而て我々の信仰生活では、如來の絶對的なお慈悲をそのまゝ信する一念に於て救はれておるのであつてこれが

平生業成と云はれる所以である。故に即得往生と云ふも平生業成と云ふもまた正定聚の位といふも同じ事をあらはしたものである。すでに平生の一念に於て信心をいたゞいて平生業成してゐる以上は肉身の生死は問題ではなくなる。生死を何時も超越して生活することが出来る。かうなるといよ／＼物凄いなものでこれが本當の信仰生活である。昔罪を犯したから改心して罪亡ぼしに信心しようとか、どうも世の中の人々の口がうるさいから高野山の山奥へでも這入つて信仰生活に餘生を送らうかなど云ふのは本當の信仰ではない。それはまだこの世の中の評判とか自己の生活への未練とか安逸をむさばらうとする心があるからである。出入りの書生と道ならぬ戀に陥り遂には夫を毒殺までして駈落ちをする、警察の追跡手厳しくして比叡山の山深く逃げ込んで罪の一生を清算して信仰生活に入る、そう云つた例は一應は自己を清算しなければならぬ氣の毒な運命の女として同情の心は起るけれども、本當の信仰生活であるか如何かは分らぬ。如來の信を得たる生活は自己の安逸とか世間の批評とかを考へての信心ではない、人生への執着のあるものではない。

死ぬも生きるも水の流れに變りはない。悠々流れてやまぬ利根川の大自然の如何に崇高なるかを見るならば、つまらないいざこざ、名譽だの利慾のとさう云ふ世界を超越して彌陀のお慈悲を喜ぶ様になつて来る、これが信仰の世界である。「我れなくも法はつきまじ和歌の浦、あをくさ人のあらんかぎりは」と此の世にあるとないと、肉身の存否は問題ではない。わが日本軍の強いのもこゝにある。寒い滿洲の野にあつて、自分の身のことや家族

の事や利害得失を考へてゐては何で戰に勝てようぞ、金鷄動草や金錢の事を頭においてゐたならば一步も前進することは出来ぬ。生何ものぞ死何ものぞ、一天萬乘の天皇陛下の御恩を思へばこそ天皇陛下の御勅命を耳にすればこそ、後へ退かうとしても却き得ない、自然々々に前へ向つて突貫せずには居れない氣持ちになつて来る。これが本當の信仰の境地である。胸は鐵砲の彈に打貫かれてもそれで退くやうな信念ではない。たとひ五尺のこの身一つは雪降り積る滿洲の野山に雨ざらしにならうとも、死んで護國の鬼となつて、それで何の思ひのこすところもない。かうなれば鐵砲の彈はおるか大砲だらうが傷痕彈だらうが押しつけくゞり分けて突撃するばかりである。これが金剛堅固の信念といふものである。

五 平生業成

親鸞聖人の弟子に高田の覺信房といふのがあつた。大病にかゝつて將に息絶えんとしてゐた時に、親鸞聖人はその臨終の枕元へ行つた。今にも死なうとしてゐる大病であるにも拘はらず覺信房は南無阿彌陀佛／＼としきりにお念佛を稱へておるので、聖人は枕元へ近よつて、「お前は苦しい中にもよくその様にお念佛をとなへてゐるのは、なか／＼感心な有り難いことである。併し極樂往生について疑ひはないか」と問はれた。その時に涙ながらに覺信房は「よろこびすでにちかづけり、存せんこと一瞬にせまる、刹那のあひだたりといふとも、いきの通は

んほどは、往生の大益を得たる佛恩を報謝せずんばあらずと存するについて、かくの如く報謝のために稱名つかまつるものなり」と答へた。これを聞いて親鸞聖人は、あゝ覺信房なればこそと涙を流して喜ばれたといふ話がある。(口傳鈔)今はのきはになつても如來の御恩を忘れる事なくお念佛を稱へる心、これが眞實信心の行者である。臨終を飾らんがためのお念佛であつたり、極樂往生をさせていたゞき度い爲に稱へるお念佛であるならば、阿彌陀如來は何故五劫の間も苦勞しようか。吾々が稱へてそれで往生が出来る様なそんな安つばい極樂ではないのである。

第十八のお誓ひには「十方の衆生、至心に信樂して、我が國に生れんと欲し、乃至十念せん、若し生れずば正覺を取らじ」とある。この至心に信樂して生れんと欲す、の至心、信樂、欲生の三つを三信と云つて、これは要するに信心のことである。又乃至十念せんとは阿彌陀如來の御名を稱へることである。即ち行である。そこで問題となるのは、乃至十念と言つてお念佛を十遍稱へなければ往生は出来ぬかと云ふことである。そうではない。乃至と云ふ意味は一遍でもよい十遍でもよい、否一度も稱へなくてもよいとの意味である。三信十念と誓つてあるけれども詮じつめてみれば十念の行は三信の信心に含められて、信心の一念によつて救はれてゐるのである。此の意味を本願成就の文によつて「諸有の衆生、其の名號を聞いて信心歡喜し、乃至一念せん、至心に廻向したまへり、彼の國に生れんと願へば、即ち往生を得、不退轉に住せん」と云つてある。

名號を聞いて信する、その聞信の一念に即得往生、不退の位に定まるのである。一念多念證文には之を詳しく説明されて、

諸有衆生といふは、十方のよろづの衆生とまうすところなり。聞其名號といふは、本願の名號をきくことたまへるなり。きくといふは本願をききて、疑ふ心なきを聞といふなり。また聞くといふは信心をあらはす御のりなり。

信心歡喜乃至一念といふは、信心は如來の御誓ひをききて、疑ふ心のなきなり。歡喜といふは、歡は身をよろこばしむるなり。喜は心によろこばしむるなり。得べきことを、得てんすと、かねてさきより喜ぶ心なり。乃至はおほきをも、少なきをも、久しきをも、近きをも、先をも、後をも、みなかねおさむる言葉なり。一念といふは、信心を得る時の、きはまりをあらはすことばなり。

至心廻向といふは、至心は眞實といふことばなり。眞實は阿彌陀如來の御心なり。廻向は本願の名號をもて十方の衆生にあたへたまふ御のりなり。

願生彼國といふは、願生はよろづの衆生、本願の報土へむまれんとねがへとなり。彼國はかのくにといふ、安樂國を教へたまへるなり。即得往生といふは、即はすなはちといふ。時を経ず日をも隔てぬなり。また即はつくといふ。その位にさだまり即くといふ言葉なり。得はうべきことを得たりといふ。眞實信心を得

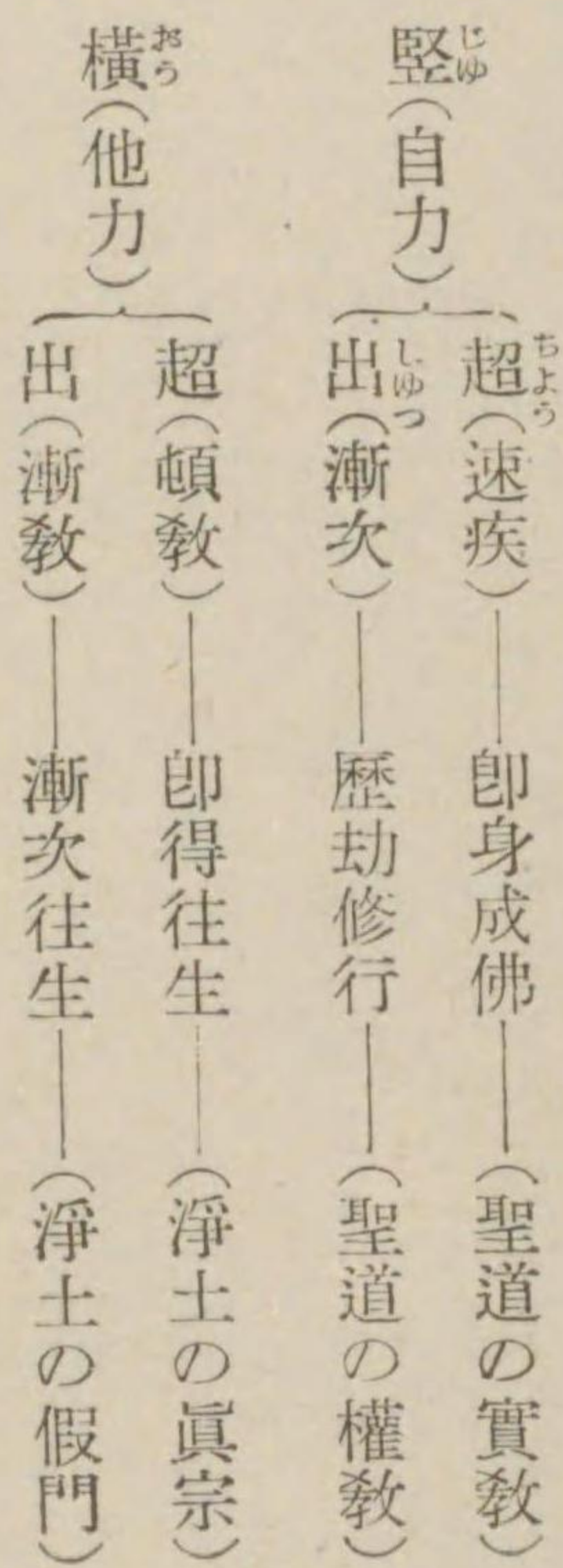
れば、すなはち無礙光佛の御こゝろのうちに攝取してすて給はざるなり。攝はおさめたまふ。取はむかへ
とると申すなり。おさめとり給ふ時、すなはち、とき日をもへだてず、正定聚の位に、即き定るを、往生
を得とはのたまへるなり。

即ち臨終を待つ要もない、お迎へを頼む要もない。聞其名號の一念に、信心決定し往生定まるのである。

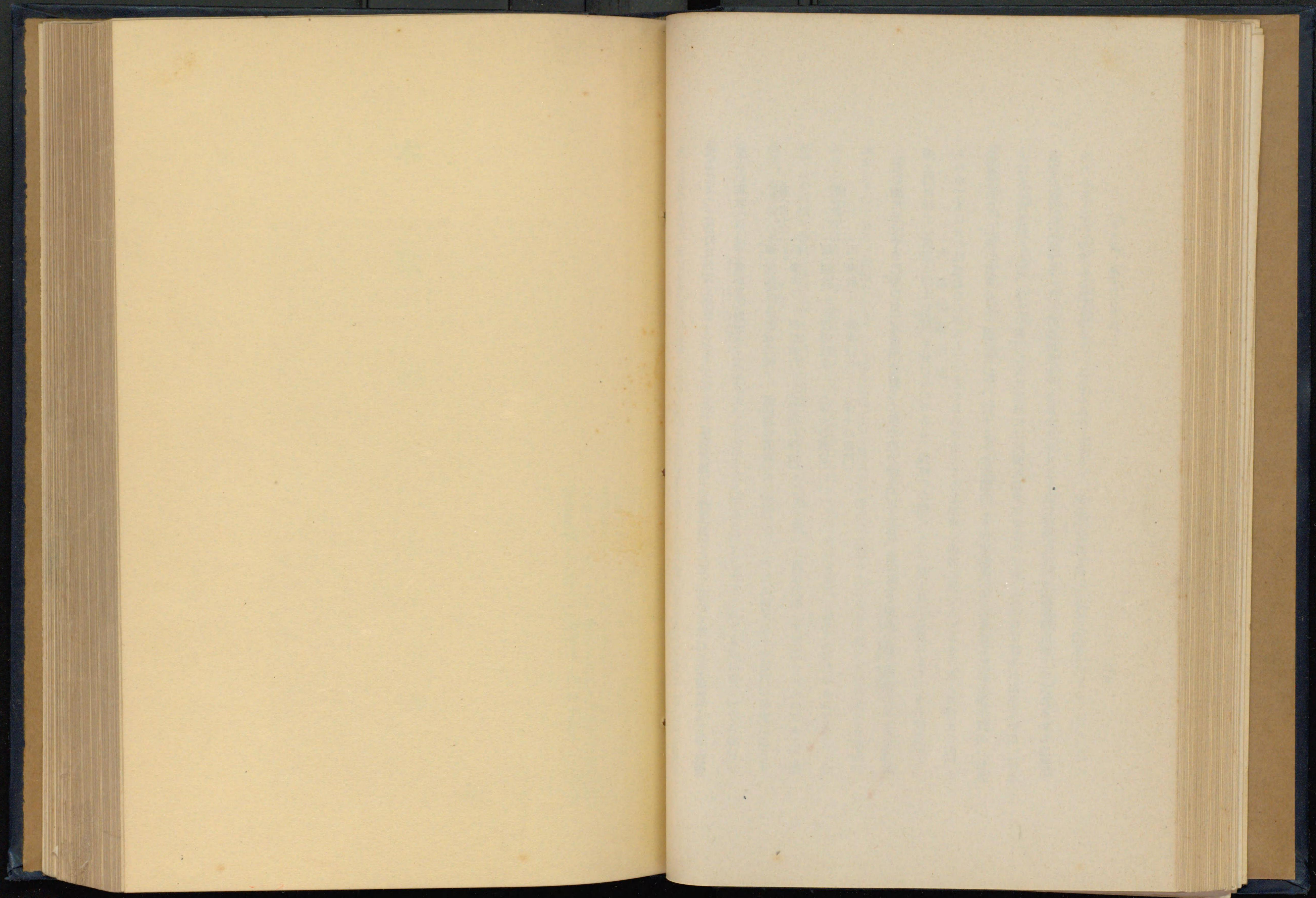
六 横超斷四流

吾々人間は肉體をもつて此の世に生き生存してゐる以上種々なる慾をもつてゐる。この慾がそも／＼迷ひの根
源をなすのである。煩惱である。この慾心煩惱は恰も風水害の際に川に溢れた泥水が一切の人家樹木をも無慘に
ぶちこわして奪ひ去つて行く様に、吾々の善い方に向つて行かうとする心を邪魔し修業を妨げるものである。そ
れでこの煩惱を暴流と呼ぶのである、この煩惱に主なるもの四種を數へて四暴流略して四流と云ふのである。慾
暴流、有暴流、見暴流、無明暴流と云つて、物が欲しい、命が惜しい、そう云ふ様な色々の修行の邪魔になるも
のである。これが影の形に添ふが如く人間凡夫である以上は必ずある。そしてどうしても離れぬ。いくら修行を
積み重ねても效目がない。處がこのやうに執念深い四流を快刀亂麻を斷ち切るが如くに、阿彌陀如來の本願力に
よつて初めて除去することを得る。而も横超と云つて何年もかゝつて漸次に斷ち切るのではなく、超は速やかに

疾くの意であり、横は堅の自力に對して横の他力をあらはす、即ち自分は少しも手を煩はさぬでもよい。彌陀の
他力によつて即時に四流を切斷するを云ふ。これは絶對他力の淨土眞宗に於て初めて味はれる境地である。親鸞
聖人の御教へでは二雙四重の教判と云つて



右の圖に示すやうに堅の自力聖道門に對して横の他力淨土門を分け、更に之を頓教の超と漸教の出とに分けて、
淨土門に淨土の眞宗と淨土の假門を分けるのである。彌陀の本願によつて淨土往生に疑ひをもつものはないが、
その中でも自分の功德をたのみにして、その足らざるところを如來の御力に待つといふやうな人は淨土の假門の
信者である。如來の眞實心と一體になつて、信する一念の端的より如來攝護の中に生活してゐる淨土眞宗の信者
とは大いに差別がある。淨土の假門の人は臨終には阿彌陀如來がお迎へに來て貰はねば往生が出來ないが、淨土
眞宗の信者には信する一念の時即得往生であるから平生より既に極樂往生の準備萬端出來上つてゐるから臨終が
來たからとて、如來のお迎を待つといふことも少しもない。安心して死を待つことが出来る。



聖典講讀全集第十二回配本・昭和十年十一月十日
印刷・昭和十年十一月廿五日發行・編輯者宇野圓空・
發行者東京市小石川區諏訪町五九番地小山久二郎
印刷者東京市牛込區改代町二四番地田中末吉・
發行所小山書店・版權所有宇野圓空及小山久二郎